第7回奈良 ESD 連続セミナー

大西　浩明

◇日時：2026 年 10 月 13 日（火）19 時～21 時
◇方法：Zoom によるオンライン形式
◇参加者：32 名
◇内容：単元構想案の相互検討④

【ルーム１】　ファシリテーター：長谷川かおり（奈良教育大学）

1)木戸香里先生(草津市立老上こども園)

5歳児「チューリップさん 春になったら出会おうね！～持続可能な栽培活動との出会い～」

チューリップの球根は、種から球根まで５年かかる　　園児の年齢といっしょ
咲いた花をどこにプレゼントしたらいいか子どもらと話し合った
→　自分が入学する小学校、地域でお世話になった人や団体など
「相互性」に絞った　　廃棄になるはずの給食が肥料になり次の栽培につながること
掘り上げた後の葉や茎も再度肥料になること

意見交流から

・種から球根になっていく過程が可視化できるようになればおもしろい。
花が咲いて終わりではなく、ずっとつながっているということに子どもが気付ければ。
絵本でそこが描かれているものがあり、ぜひ紹介したい。
・野菜でも苗から植えることが多いが、種をとって次につなげる活動を大切にしたい。
・種に着目するなら、受粉のしくみに気づくことで性教育にも発展する。
・自分が生きてきた５年間を、種から球根になるまでの過程に重ねて考えることもできる。
・年中、年少の子への球根の引継ぎも大事にしたい。

2)中川珠紀先生(草津市立玉川こども園)　5歳児「世界で一番おいしいピザをつくろう」

・園で栽培したものを使って調理や加工をしている
どんなふうにして食べたいか、子どもが決めながら進めている
・ピザづくりを通して、世界で食べられているピザや料理について関心をもたせる
・みんなで一緒に食べることの楽しさを感じている
・よりおいしく食べるための工夫（食材や調理の仕方など）をさせる
・地域の方との交流（ピザ専門店の方に教えてもらいながら）を積極的に

意見交流から

・１時間の保育計画だけを詳しく書いても、目標に達する学びの過程が伝わりにくい。
評価規準に設定したものが網羅できない。
その活動までの経緯なども含め、展開が分かるように表現できれば。

3)高松美香先生(草津市立玉川こども園)　5歳児「からだの救急箱」

・室内での衝突によるケガが多い　　自分で説明できる子も少ない
・予防できるケガは努力してなくしたい　　自分のケガを説明できるようにしたい

・チャレンジしたうえでのケガは仕方ない　　でも防げるケガはある
・自分の行動が変わることで、だれかを守ることにつながる
・「けがマップ」をもとに、どこでケガが多いのか考えさせた　　室内のケガが多いのに驚いていた

意見交流から

・子どもが客観的に捉えることができるようになってきた。「けがマップ」で可視化できたから。
・軽微なケガが多い学年は、大きなケガにつながっていることがデータから見えてきている。
　職員にとっても警鐘になっている
・自分たちで「どうしたらいいのか？」を考えるためには、こういう統計をもとにした可視化をすることが大事ではないか。
・看護師としては、先生たちとの協働が大事だということを改めて感じることができた。

【ルーム２】　ファシリテーター：河野晋也（奈良教育大学）

1)牧原孝弥先生(奈良教育大学附属中学校)　　中学校特別支援学級(知的) 社会科

・学校の運動場にシカが入ってきてそこにフンをしていくのが、気になっている。
・子どもたちは気にしていない（困り感がない）様子。
・休み時間に子どもを追いかけるシカもして困ったことも。
・運動所に伸びた草を食べにシカが来ている。
・シカが好きな子もいる。

意見交流から

・今やシカは奈良公園周辺の問題だけではない。さらに広い被害が出ているのが現状。
・滋賀県にはシカの害はない。地域ならではの教材になる。
・シカが山を下りてきているのは山の下草が減ってきているのが原因の一つ。
・地域の課題が学校の課題になっている珍しい例だと思う。
・学校で起こっている問題を具体的に捉えさせてから、地域の課題であるということを捉えさせる。
・地域の課題の解決策を、学校で試すことができるいい機会になるのでは。
・学校の中に、シカが入っていいエリア、入ってはいけないエリアと分けてみる。
・何年か前に奈良女子大の学生プロジェクトで、東大寺内で切ったナンキンハゼで桜の木を守ろうと柵を作っていた。
・山形県ではシカの被害がない。代わりにクマのフンなどが課題になっている。
・全国的に課題となっている野生生物との共生について考えさせることもできる。
・和歌山県には竹を使って、鹿よけを作っている自治体もある。

2)津田みなみ先生(奈良教育大学附属中学校)　中学校１年 総合的な学習の時間

「歴史遺産×現代エンタメ:平城宮跡での大規模ライブは「あり」か「なし」か？
～持続可能な地域共生と合意形成の探究～」

・実際に平城京で開催されたライブを基に問いを投げかける。
・ライブに携わった団体や商店街、地域住民など様々な視点で考えさせる。
・次年度、奈良めぐりを見据えて提案を考えさせたい。

意見交流から

・中学生にはアーティストという刺さりやすい導入でいいと思う。

・キャリア教育にもつながりそう。
・文化財とライブという交わりがなさそうな実践だが、なぜそこでするのか、それは本当にいいことなのか、など、多角的に考えられる教材だと思う。
・文化遺産・文化財も時代によって変わっていく。
・その時代の人に合わせて生きる、楽しむことができればいい。
・平城京の生き物もどんどん減っている。生き物の視点も取り入れてもいいかも。
・残す？壊す？変化していくことも歴史になる。

3)堀内千幸先生(奈良教育大学附属中学校)　中学校2年　国語科「短歌の創作教室」
・子どもたちから百人一首をつくりたいと声が上がった。
・相愛大学の先生の協力のもと、十二単の着付けや束帯の着付けを見ることができる。
・古今和歌集から、自分なりの季節の組み合わせを考え、自分の短歌を創作させたい。
・推敲の部分に力を入れたい。
・失われつつある季節感、知ったけど使わない語彙、他人へ伝えるコミュニケーションなどを伝えてもらえれば。
・色んな言語刺激を生徒に与えたい。

意見交流から
・古文で季節を表すのがいい。
・折枝を使って、今の時代ならどんなものを添えて季節を感じさせるかなど考えると楽しい。
・映画「君の名は。」も古今和歌集が関係している。
・「現代の歌も意味が分からないことがある」という入り口も興味が出るかも。
・特別支援学級でも、古今和歌集を取り入れたりすることができる。「楽しい」という言葉をリズムに合わせるなら、どんな言葉を入れるかなど。
・推敲するときの生徒たちの視点をもたせるために、前時までの学習が重要になってくる。生徒がこだわりをもって意見をしてくればいい。

【ルーム３】　ファシリテーター：中村友弥（奈良市立朱雀小学校）
1)井上岳海先生(奈良女子高等学校)　高校1年　総合的な探求の時間・科学(学習指導案検討)
「春日山原始林から考える気候変動の時代のまちづくりと私たちの暮らし」
・春日山原始林の生態系課題（シカ食害、ナラ枯れ、後継樹不足）を出発点に「生物多様性を通した気候変動教育」を展開。
・春日山原始林 FW やならまち散策、大和ハウス工業（ZEH や木材利用)、ビーフォレスト・クラブ（花バチ・ハチ宿づくり）と協働。
・自然保護と暮らしの両立を模索し、生徒自身による環境配慮型まちづくりの提案・実践を推進。

意見交流から
・春日山原始林→大和ハウス→ビーフォレスト・クラブへと展開する明確なフェーズ設計が評価される。
・「春日山原始林を未来へつなぐ会」とのタイアップによる実効的な学びの深まり。
・ならまちのデザインやハチ宿づくり等、グループ学習から個人の課題探究への広がりが期待される。

2)堀内怜央先生(和歌山県橋本市立紀見小学校)

小学校4年 総合的な学習の時間「地域の高齢者の生活と身体障害者の現状(福祉学習)」

・障害や高齢者福祉に関する現状と課題を調べ車椅子体験等の実体験を通じて困り感を捉える福祉単元。

・視覚・聴覚・肢体不自由等の障害を支える工夫や開発技術を調査し、PowerPoint にまとめて学習発表会で保護者へ発信。

・誰もが幸せに暮らせる地域づくりに向け、自分たちにできる共生の工夫を模索。

意見交流から

・障害関係を扱う際は極めて慎重に行う必要があり、目の前の子どもへのきめ細かな配慮が不可欠。

・支援学級の教員等、校内連携を図りながら指導を深める重要性を確認。

・単なる同情や体験で終わらせず「社会にあるバリアをどう解決するか」という社会モデルの視点や「福祉ビンゴ」等の工夫が必要。

3)三笠日向先生(大阪市立歌島小学校) 小学校5年 国語科・総合的な学習の時間 (学習指導案検討)

「『注文の多い料理店』から学ぶ(平和と公正)」

・宮沢賢治の名作を通じ、紳士と料理店の「支配／被支配」の二重構造を読み解く。

・ガルトゥングの「3 つの暴力(直接的・構造的・文化的)」フレームを導入し、ピラミッドチャートで日常の不平等を分析。

・「声の大きい子への偏り」「多数決による排除」等、学校生活の見えない支配を見つめ直し、対等な対話行動へ変容を促す。

意見交流から

・「直接的な暴力は目に付きやすいが、構造的・文化的な暴力には気づきにくい」という本質的課題を共有できる。

・学級内に潜む「決めつけの空気感」への気づきを促すアプローチが秀逸。

・文学作品のレトリックと平和学の概念を架橋し、児童の日常のコミュニケーション変革へ結びつける手腕が注目される。